

公開講演会記録

魯迅のデスマスクを採った日本人
歯科医の謎を解く——奥田杏花の人物像を明らかにし、
併せて高橋徹志に及ぶ

慶應義塾大学名誉教授 長堀祐造



はじめに

講演時のサブタイトル「荒唐無稽さ」云々は少し大げさで恐縮です。「ひょっこりひょうたん島」以来の井上ひさしファンとしては大江健三郎氏とともに魯迅の愛読者、応援団であった井上さんを非難するつもりは毛頭ありません。本日はあくまでこの芝居の主要登場人物、魯迅のデスマスクを採った歯科医・奥田杏花の人物設定が完全な虚構であることを魯迅研究の立場から示しておくということに尽きます。

また、新たにわかったもう一人の上海の歯科医で最晩年の魯迅の歯を診ていた高橋徹志についても予定外ですがお話しします。この二人の人物像は、魯迅死去から90年近い今日まで不明でした。昨年来、奥田、高橋両歯科医師それぞれのご子息を捜し当て、インタビューにこぎ着けて、魯迅研究史の空白を些か埋められましたのでここに紹介する次第です。

1. 奥田杏花調査に至る過程

1936年10月19日払暁、魯迅が上

海^{スコット}施高塔路の自宅で息を引き取ると、上海内山書店店主の内山完造は近所の歯科医で内山書店の「漫談会」の常連、奥田杏花（本名・愛三）にデスマスクの採取を依頼します。このデスマスクは今、上海魯迅紀念館に保存され、魯迅の髭や眉毛が貼り付いて残っています（写真1）。奥田はまた魯迅死去直後の『週刊朝日』11月8日号に「死ぬ二日前の魯迅さん―衝突があり相ですな」という文章を寄稿しています。魯迅の健康状態や日中問題に関する魯迅の悲観的認識、「内山書店漫談会」の

様子や歯科医らしく魯迅の入れ歯の状態についても書いています。ここから魯迅と奥田の親交は明白なのですが他に奥田を知る資料はありませんでした。奥田の名前は『魯迅日記』にはなぜか登場せず、内山ら魯迅周辺の日本人の回想録にも詳しい人物紹介はありません。

この奥田に広く光を当てたのが井上ひさしです。1991年、魯迅夫妻、内山完造夫妻それに魯迅の主治医の日本人医師、須藤五百三と当の奥田愛三の6人の登場人物で『シャンハイムーン』を書き上演しました。私も初演を面白く見たのですが、奥田の人物設定があまりにリアルなのに驚きました。藤井省三、瀬戸宏といった中国文学・演劇の専門家はすぐに時代背景や人物設定に問題ありと劇評に書きました。



写真1 魯迅のデスマスク
(上海魯迅紀念館蔵。『周氏兄弟研究』特刊シリーズIより)

余談ですが藤井さんには、劇評を読んだ井上から「いい加減なことばかり書いて申し訳ない、批判してくれたのは藤井さんだけだ」といった主旨の書信が届いたと、私は当時、藤井さんから聞きました。

私も奇妙に感じ、魯迅の病気や受診医師の研究で有名な医師で医学史家の泉彪之助先生(2018年没)に書信で奥田のことを尋ねました。泉先生は『シャンハイムーン』初演前から、『週刊朝日』復刻版担当編集者の畠堀操八氏と奥田の調査を進めており、奥田愛三未亡人シズさんが長崎に健在ということをつきとめ、すでに連絡を取っていました。

シズさんは泉先生宛書信で、自身の上海行以前に魯迅は没していましたが奥田は上海在住20年、魯迅とは10年来の付き合いで週2回は雑談しておりデスマスクも採ったこと、また愛三は明治26(1893)年11月30日生まれだと証言しています(シズさんは2005年没)。さて、今回の調査に威力を発揮したのは泉先生ご教示の二書でした。『日

本歯科医師名簿』1935年版(日本歯科新聞社)「中華民国の部」には「上海、施高塔路一 奥田愛三」とあり、その右隣には「上海 北四川路1095 高橋徹志 同 竹中昭二」と載っています。後者はあとで触れる高橋徹志とその弟、竹中昭二のことです。

もう一書『日本歯科医籍録』3版(医学公論社、1955年)には「奥田愛三／現住所：長崎市東浜町／本籍：京都府／生年：明治二六年十一月二十日／学歴：大正十五年東歯校卒／経歴：東京救世軍病院歯科部創設。上海市に開業。昭和二二(年)帰国。／趣味：釣魚」とあります。

泉先生は当時、この資料に拠り奥田が東京歯科医学校出身で救世軍病院歯科部の創設者であることを明らかにする文章を発表し、米留学経験者で母親が中国人などという井上の奥田像は完全な虚構だとしていました。しかし、泉先生たちの調査はここで終わり、爾来三十余年、私は昨年やっと秋吉收九州大学教授の協力を得てこの課題に取りかかりました。



写真2 若き日の奥田杏花（国会図書館蔵『基督に刃向ふ者』口絵）

2. 奥田杏花資料の発見

私たちは魯迅関連記事を求めて奥田が戦後、随筆を連載していた『長崎新聞』を調べ始めたのですが膨大な作業量に中止を決断、国会図書館のデジタル資料に当たったところ、新発見に恵まれました。まず奥田の小説集『基督に刃向ふ者』です。著者署名入りで寄贈されており、1932年1月20日、上海発行、著者兼発行者は本人で、自費出版と推測されます。若き奥田の写真が口絵にありました。初めて見る奥田の写真でした（写真2）。次いで秋吉教授が3篇の文章を発見します。

『日本歯科医学会雑誌』（1965年11号）「長崎の魚と催し 有明『むつ五郎』の由来」で奥田は「私と魯迅とは永年親しくしていたので、彼が死去した日丁寧にデスマスクを採り、宋

婦人（魯迅夫人・許広平、別名景宋）に謹呈した」と書いています。奥田自身がデスマスク制作について書き残した唯一の文章です。

続いて「暗に葬られた 上海丸の最後」（『長崎日日新聞』1957年6月19日）。1943年10月30日未明、上海・長崎を結ぶ定期船、上海丸が日本軍の南方輸送船、崎戸丸と衝突して沈没し、戦時中は敵の潜水艦攻撃によるものと発表されてきた事件について、この船に乗り合わせた奥田は現場の状況を目撃し、臨場感溢れる筆致で描いてみせています。

さらにミニコミ誌『長崎手帖』（1958年10月）に書いた「白萩」という短文です。上海時代の夏の長崎避暑の思い出や引揚げ直後のインフレ、食糧難、そして気晴らしの釣りの話など軽やかながら、深い省察を感じさせる文章です。

最後は歯科医開業試験合格直後の奥田が労働者のために東京下谷の救世軍病院に歯科部を創設するという1917年12月30日付『読売新聞』の記事で

す。病院長曰く「担任する医師は奥田愛三と云ふ歯科医で大そう自分が苦学した経験から下層労働者に同情し種々特殊の便宜を下さる筈です」と。

3. 第一次長崎探訪から奥田杏花子息・昇氏夫妻インタビューへ

2023年6月、文献調査を踏まえ秋吉教授は長崎県長与町の奥田愛三・シズ夫妻旧居地番を訪れましたが、そこにはアパートが建ち夫妻の旧居は跡形もありません。諦めて帰ろうとすると隣家のインターホンが見え、押してみると出てきた方がなんとシズ夫人の甥御さんでした。このお宅はシズ夫人の実家だったのです。そして、いここに当たる奥田夫妻の子息、奥田昇氏をご紹介いただき私と秋吉氏は翌7月に福岡県糸島市の奥田昇氏宅を訪ねました。

奥田昇氏は1943年生まれ、現在81歳、東京での勤務を経て糸島市の泰子夫人の実家近くに移り住み、今も現役の行政書士として活躍中です。夫人を交えてのインタビューでわかった愛

三のことを次に紹介します(順不同、主語の愛三は省略)。

(1) 本籍地は京都府熊野郡久美浜町(現京丹後市)、生家は元造り酒屋。江戸時代の飢饉時に、米を村人にお粥にして提供してしまい、愛三生誕時は酒作りは廃業していた。医者を多く輩出した家系で、親戚筋には国会議員や閣僚、財界人もいる。

(2) 上海で歯科医をしたあと、海運業にも従事、戦中は軍医として従軍、ジャワで現地の人々の診療にも当たり、終戦を迎えた。

(3) 2度結婚し、初婚で二男・一女(全員故人)、シズ夫人との再婚で昇氏をはじめとする二男・一女を得る(写真3)。みな福岡市と糸島市に健在であ

る。シズ夫人は東京で菊池寛の近所に住み、文人たちとも交流があったらしい。上海で愛三と結婚後、戦争末期、郷里長崎に昇氏ら子どもを連れて引揚げたが、昇氏はそこで被爆し九死に一生を得た。

(4) 1946年、長崎に引揚げ歯科医院を開業。医院は当初、長崎市浜町に、その後、新町(現興善町)に移転した。(5) お金のない患者からは治療費を取らず、医師は人命を救う神聖な仕事と考え、孫たちが医師になることを願った。(6) 趣味人・文人で釣りを愛し、戦後は随筆を長崎新聞に連載。また、若い頃は俳優になれと周囲から進められるほどの美男子であった。(7) 魯迅の歯を診たこと、デスマスクも

採ったこと、内山完造と親しかったことを昇氏に話していた。

(8) 魯迅のデスマスクを愛三は日本に持ち帰っていたと昇氏は確信しているが、上海時代のものを保管していた蔵は1950年代半ばに

火事となり、すべて消失してしまった。(9) 小腸癌で、1979年2月22日に逝去。墓は長崎市寺町の皓台寺にある。

4. 第二次長崎探訪 奥田愛三の墓所と歯科医院跡を求めて

昨年9月初め、私たちは奥田愛三の足跡を求めて長崎の街を探訪しました。最初に向かった愛三の墓所、皓台寺は長崎市寺町の曹洞宗の名刹で、高島秋帆やシーボルトの娘・楠本イネの墓もあります。奥田家の墓石裏面には「昭和五十三年十二月 奥田愛三 建立」とあり、愛三の逝去2か月ほど前に建てられたことがわかります。

次いで、奥田歯科医院旧所在地2か所を確認しました。昇氏によれば、昭和25(1950)年に歯科医院を開業し場所は、長崎市浜町商店街にあったタテノ洋品店の2階か3階かで、その後、昭和35(1960)年前後に長崎市新町の朝日新聞長崎総局の斜向かいに移転し、引退までここで開業したということでした。

昔の浜町商店街地図と照合しながら



写真3 晩年の奥田愛三夫妻
(1970年代。奥田昇氏提供)

現在の浜町アーケード街を実際に歩いてみると、今、ドラッグストア・マツモトキヨシから西隣の建物、tutuanaのある辺りまでがタテノ洋品店跡地ということになります。その後、歯科医院は近所の長崎市新町に移転しました。昇氏からは「朝日新聞の斜向かい、測量事務所の正面」と聞いていましたが測量事務所はすでになく、付近の創業78年という井上印房の老婦人にお尋ねすると、奥田歯科医院旧所在地が難なく判明しました。今は1階に長崎焼鳥の店が入る7階建ビルになっています。魯迅は父親の遺伝で生涯、歯痛に悩まされましたが1902年3月末、日本留学への船旅の途次、長崎に寄港した際、歯医者で「歯石」を取ってもらって感激しています。その長崎で奥田が開業したのは奇縁と言っはかありません。

5. 再び『シャンハイムーン』

『シャンハイムーン』の話に戻ります。芝居の劇中現在は1934年8月から9月、場所は上海内山書店2階倉

庫です。愛三の年齢は39歳、米国留学帰りでパッカードを乗り回す些か軽薄な遊び人という設定で、さらに母親は中国人で愛三は上海から引揚げ後、鎌倉の歯科医院の婿養子となって歯科医を続けたことになっています。こうした愛三の人物像と今回の調査で判明した実際の愛三の経歴を比較し、その虚構性を確認しておきます（文献注省略）。

まず、昇氏提供の戸籍情報によれば愛三の両親は奥田得一・は津夫妻、愛三はその三男で誕生日はシズ夫人の証言通り明治26年11月30日です（歯科医師名簿は11月20日）。母親は日本人、また官報その他から愛三は米国留学ではなく、東京歯科医学専門学校の別科、東京歯科医学校出身でした。東京下谷の救世軍病院に歯科部を創設後、一時、兵庫県八鹿町で開業、1925年上海に渡り開業、1927年に上海に移り住んだ魯迅と親交を結び、大戦末期は軍医としてジャワに従軍、戦後1946年に長崎に引揚げて開業しています。上海でパッカードに乗っていたこともまずありません。

最後に愛三の子どもたちを襲った戦争の悲劇について一言。長女・新子は米軍の機銃掃射事件「いのはなトンネル銃撃事件」（終戦直前、今の八王子市で発生）で死亡。同事件の「慰霊の会」（八王子市）に私たちの調査報告を送り、総務省のホームページ上の慰霊碑に、奥田新子さんの名前がないことを伝えたところ、「慰霊の会」は戦後80年の区切りに慰霊碑に新子さんの名を刻む方向だと連絡を受けました。三男・昇氏は長崎で被爆して九死に一生を得ました。昇氏がインタビューで、同級生たちが次々と亡くなっていく様や、お子さんの生まれるときのストレスの凄まじさを語る言葉には、強い衝撃を受けたことも忘れられません。映画『母と暮せば』（山田洋次監督、2015年）を構想していた井上さんが、生前この話を知ったら間違いなくもつ一つの『シャンハイムーン』を書いたでしょう。

『シャンハイムーン』、この魯迅研究者に対する挑発がなければ私も奥田杏花を調べることはなかったでしょうから、これは井上さんの「功績」で感謝

しなければなりません。

6. 魯迅晩年のかかりつけ歯科 医 上海歯科医院の高橋徹志

予定外ですが、晩年の魯迅一家かかりつけだった上海歯科医院の高橋徹志歯科医師について紹介します。魯迅との縁は深いのですが人物像は不明でした。つい最近の新発見も含め調査結果をお話しします。

1927年10月に上海に居を構えた魯迅は当初「密勒路の佐藤歯科」や「宇都歯科医院」で受診します。両歯科医師のことは未詳ですが前者は佐藤吉郎と思われます。1930年2月28日、魯迅は日記に「蘊如〔魯迅三弟の妻〕および広平〔妻〕とともに歯科医院に行き治療」と記し、1932年4月に「前園〔立衛〕歯科」に数回受診したのを例外に逝去までの6年間、一族でずっと上海歯科医院で受診しています。魯迅は親族のために高橋医師との間で日本語通訳も務めています。

『魯迅日記』には高橋徹志や上海歯科医院を指す言葉が頻繁に現れます。

1930年2月28日からの約6年間で46回登場します。1930年には30回、その後1935年まで毎年数回、計46回です。須藤五百三に次ぐ回数だろうと思います。このうち、6〜7回は受診記録ではなく私的交流の記録です。1930年の6、7月に、徹志は4度、魯迅宅を訪問しており、6月21日の最初の訪問では、英訳版『阿Q正伝』を贈られています。さらに目を引くのは7月12日に夫人同伴で訪問していることです。魯迅は通常、内山完造宅を接見場所として使用しており、自宅を4度訪問した徹志は日本人としては異例です。また夫人同伴で魯迅宅を訪問した日本人も内山書店関係者を除けば他にいません。魯迅宅を訪問した日本人女性も作家の林芙美子と魯迅お気に入り

の歌人、山本初枝ぐらいです。また魯迅は1、2度、受診目的以外で高橋宅を訪問した可能性もあります。二人は歯科医と患者という関係を越えて個人的にも親しかったことが窺えるのです。

前でも触れた1935年版『日本歯科医師名簿』には「上海北四川路1095 高橋徹志」とありましたが、1955年版『日本歯科医籍録』にも「高橋徹志」が岐阜県大垣市の部に出ています。住所は「大垣市藤江町」で「中央繊維大垣工場診療所」に勤務しています。同姓同名、1900年という生年、1925年の歯科医師登録などからこれは上海歯科医院の高橋徹志と同一人と断定できます。同名簿1968年版では高橋徹志の項は住所が「大垣市荒尾町東」、中央繊維工場診療所勤務は過去の略歴欄に移り現職は「高橋歯科医院 1956年5月開業」となっています。徹志の左隣の欄には高橋五郎という名が見え、住所は「大垣市赤坂町」ですが「中央繊維診療所歯科担当の傍ら」、同じ名称の高橋歯科医院を1949年開業とあります。徹志と同じ日本歯科医専卒、中央繊維診療所勤務、同名の高橋歯科医院を開業ということから、徹志、五郎両氏には親族関係が強く推察されました。

こうして追跡が始まり、大垣市の歯

7. 高橋徹志の発見

科医院を調べると高橋五郎の住所、大垣市赤坂町に今も高橋歯科医院があります。そこで2024年春院長の高橋敏氏に手紙を書き、魯迅の歯を診ていた高橋徹志とは親戚でしょうかとお尋ねしました。その結果、電話をいただき、徹志は敏氏の父・五郎の兄で自分からは伯父に当たること、徹志の子息・一吉氏は歯科医にはならず、県庁を定年退職し、近所に住んでいるとのこと、連絡先を教えてくださいました。

こうして徹志子息・一吉氏、甥・敏氏とメール、電話、手紙でやりとりをし、この「2024年」9月下旬に大垣市で両氏にインタビューし、徹志の出身地である隣町の池田町善性寺にある徹志・五郎ご兄弟のお墓を訪れました。以下、お二人からの提供情報と私の文献調査から高橋徹志の人物像を紹介します。

高橋徹志は1900（明治33）年12月7日、岐阜県揖斐郡池田町の医師、高橋慶太郎の五男一女の次男に生まれました。三男は医師、次男、四男、五男の3人が歯科医になったという医師の家系です。



写真4 晩年の高橋徹志
（高橋一吉氏提供）

徹志は実家から近い旧制大垣中学（現大垣北高校）卒、そして日本歯科医学専門学校（現日本歯科大学）を1925年に卒業、同年10月に今の丸ノ内線新中野駅付近の青梅街道沿いで高橋歯科医院を開業します。1926年の『日本医籍録』2版では徹志の趣味は「読書」とあります（写真4）。

8. 上海歯科医院の開業・高橋徹志・淳三・昭二、三兄弟の発見

中野での開業から数年、徹志は上海に渡って北四川路デイクスウェルアパート2階で上海歯科医院を開業します。開業時期は、歴史的建築物として現存するこの建物の竣工が1929年であり、1930年2月28日の『魯迅日記』に同医院が登場することから1929

年半ばから1930年初頃と推定されます。

さて新発見が続きます。『魯迅日記』1933年10月23日に拠ると、魯迅は旧友の息子が福民医院に入院して回復したお礼に病院関係者を招宴します。日本人経営の福民医院に魯迅は一族郎党で世話になったおり、息子海嬰もここで難産の末、生まれたのでした。実はこの宴会に二人の高橋が出席しており、『魯迅全集』注は福民医院レントゲン技師高橋淳三と上海歯科医院の高橋徹志とだけ記すだけなのですが、今回、一吉氏と敏氏のお話から高橋淳三が徹志の兄だとわかりました。福民医院関係者でない徹志が招宴された謎も氷解します。

さらに重要なのは、魯迅は1936年5月31日、米国人記者、アグネス・スメドレーの紹介で米国人医師、トマス・ダンの診察を受け、重症であると告げられ、翌6月15日頃、福民医院で胸部X線写真が撮られます。この写真からも重症と判明しますが、当時の福民医院放射線室長は高橋淳三でした。

この胸部X線写真は現在上海魯迅纪念馆に保存されており、魯迅の病状と直接の死因を証明する唯一の証拠として極めて重要なものです。魯迅と高橋兄弟の関係から考えてこの写真が淳三自身の手で撮影されたことは間違いありません。

実は魯迅の死因が主治医の元日本軍医、須藤五百三による謀殺だという説が魯迅の家族周辺から出ていたのですが、1984年に中国の権威ある医師たちによってこのX線写真の読影会があり、魯迅の死因は結核の合併症としての気胸が直接の原因ということを決着します。中国の魯迅研究者の多くもこの説を採るのですが、魯迅の息子、周海嬰は2001年の自著で再び問題を蒸し返しました。これには中国国内でも批判が出て良識が示されましたが、日中関係が悪化するたびに謀殺説が出てくるのは残念なことです。こうした偏見は須藤医師を主治医とした魯迅の選択、見識を侮辱するものだと思えます。現在の主流の研究は須藤の治療は当時の標準治療の範囲内と見て

います。

さて、一つ見落としがありました。前述の上海の日本人歯科医師名簿に高橋徹志と同じディクスウエルアパートで開業している竹中昭二の名前がありました。迂闊にも調査対象に入れてなかったのですが、ある資料になぜこの竹中昭二が上海の淳三宅に逗留したと出てきました。大垣で一吉氏から、高橋5兄弟のうち、3人が歯科医師で、四男、四郎は別名・昭二だと聞いたのをふと思い出しました。そして官報や歯科医名簿から、竹中昭二と高橋昭二の歯科医師登録番号が同じであることがわかりました。つまり同一人物なのです（後日、一吉氏から昭二氏が一時竹中姓だったことを確認する証言をいただきました）。高橋徹志はある時期、弟・昭二と一緒に上海歯科医院で診療していたわけです。魯迅一族はこの弟さんにも受診していた可能性があります。

ます。こうして高橋三兄弟は上海でろって病院のX線技師、歯科医として魯迅一族の医療に寄与していたのです（写真5）。

9. 戦後の高橋徹志

高橋徹志は戦後、上海から東京に引揚げ、一吉氏によれば愛知県一宮市起で短期間開業した後、中央繊維大垣工場診療所勤務の傍ら大垣市で開業しました。徹志は魯迅の歯の治療をしたこと、英訳の『阿Q正伝』を魯迅の署名入りでもらったこと、それを引揚げの際、上海に置いてきてしまったことを一吉氏に話していました。



写真5 1936～1937年にディクスウエルアパートで撮影された高橋三兄弟一族。後列右から、淳三、徹志、昭二。前列右から、徹志夫人シゲ、淳三娘、三兄弟の母、淳三息子、淳三夫人。（高橋一吉氏提供）

私生活の面では引揚げ後、魯迅宅に同伴したシゲ夫人とは離婚し、一灯園という京都の懺悔奉仕団体で「修行生活」を経験しますが、これは裕福な上海での暮らしをすべて失った虚無感が原因だろうと弟の五郎は推測していたと敏氏は話します。その後再婚し、徹志52

歳のときに長男一吉氏が生まれ、息子の成長を見届けるべく80歳近くまで歯科医を続けたということです。話が面白く、人を引きつける天性の魅力を備えていた徹志は、女性にもて、そういうお茶目で、人なつっこい性格のため、魯迅に気に入られたのではないかと一吉、敏両氏はお考えです。また徹志は何よりも正直な人であったとのこと。前述の趣味は「読書」とあることから、徹志は文学談義で魯迅の眼鏡にかなったと私は想像したのですが、お二人は「それはありえない」と大笑いされました。

高橋徹志は1987年12月15日、膵臓癌のため、満87歳で亡くなります。今は故郷池田町の善性寺に眠っています。



写真6 高橋徹志氏の墓（筆者撮影）

す（五郎氏の墓もこの寺にあります）。戒名は「月光院釈浄心」。「月光院」の3字は徹志自身がつけたとのこと。魯迅が好きなものは正直者と月夜だと須藤五百三が書いていますが、まさに「正直者」だった高橋徹志は魯迅の言葉を知ってか知らずか、自分の戒名に「月光」を入れたのでした。高橋淳三技師は1975年10月16日、行年78歳で他界し、善性寺近くの霊園に眠っています。昔のレントゲン技師の宿命と言うべきか、後年は右腕を切断されたとのこと。末弟昭二は1979年2月に亡くなっています（写真6）。細かい話になりましたが、調査の過程も一緒にお楽しみいただけたなら幸いです。『魯迅全集』の次の版が出る

ときには奥田杏花、高橋三兄弟の注がわずかななりとも充実したものになることを願ってやみません。
当日、90分という長時間の講演機会をくださった国際善隣協会に感謝いたします。

付記：本講演は2024年10月26～27日開催の「魯迅仙台留学百二十周年記念国際シンポジウム」（東北大学）に提出した講演原稿「魯迅と二人の上海在留日本人歯科医：奥田杏花と高橋徹志」および長堀・秋吉收「魯迅のデスマスクを取った歯科医・奥田杏花（愛三）の人物像」（『周氏兄弟研究』特刊シリーズ1、2024年7月）に基づくものです。

（2024年11月15日・21世紀アジア塾）

筆者略歴（ながほり・ゆうぞう）

1955年埼玉県生。東京大学文学部卒、高校教員を経て早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。桜美林大学助教授を経て、慶應義塾大学教授、現在同大名誉教授。専攻は魯迅を中心とする中国近現代文学及び中国トロツキー派史。博士（文学）。